

令和5年度 群馬県総合教育会議 議事録

開催日：令和5年6月21日（水）11：00～12：00

会場：ぐんま国際アカデミー中高等部（太田市内ヶ島町1361-4）

出席者：【会議構成員】

山本知事、平田教育長、沼田委員、河添委員、日置委員、小島委員
（代田教育長職務代理者は欠席）

【有識者】

ぐんま国際アカデミー中高等部 金子校長

【事務局（教育委員会）】

柿沼教育次長、栗本教育次長、
春田義務教育課長、角田学びのイノベーション戦略室長

【事務局（知事部局）】

古仙知事戦略部長、永井戦略企画課長

（会議開始前に、会議構成員が、ぐんま国際アカデミー中高等部の非認知能力育成に関連した授業（国際バカロレアのプログラムによる授業等）を視察）

1 開会

2 あいさつ

（山本知事）

- ・本日は金子校長をはじめ、ぐんま国際アカデミーの皆さん、大変素晴らしい機会を作ってください、感謝申し上げます。教育委員会の皆さんにも、ご多忙中お集まりいただき、感謝申し上げます。
- ・ぐんま国際アカデミーにはずっと注目しており、この学校は本当に素晴らしいと以前から思っていた。
- ・群馬県のイベントである「湯けむりフォーラム」のセッションの中で、IT関係で気鋭の有識者を集めて対談を行ったが、その際にもぐんま国際アカデミーは素晴らしい学校だ、東京のIT経営者が師弟を通わせている、と言っていた。
- ・こういう学校が複数あれば、群馬県で教育イノベーションも進むのではないかと考えている。視察の機会を作ってください、大変ありがたい。
- ・群馬県は非認知能力に力を入れており、OECDが実施する社会情動的スキル調査（SES）に日本で唯一参加している。最先端の流れにしっかり群馬県を加えていき、今回金子校長にも加わっていただき専門委員会を作って、子供たちの千差万別な能力を応援してあげるような仕組みを群馬県が作りたいと考えている。
- ・私の知事としての信条は、劣化東京をつくらないこと。そういう意味では、全国に通用するぐんま国際アカデミーのような学校があることは、群馬県にとっても良いと思うし、知事としてもしっかり応援していきたい。ぐんま国際アカデミーのような学校を群馬県に作っていけば良いのではと、個人的には思っている。

- ・今日は授業を拝見させていただいて、教室の雰囲気が非常に良く、生徒の皆さんも自由に発言されており、思った通りの雰囲気だと思った。
- ・今日は忌憚のない意見交換をお願いし、群馬県が全国で先陣を切っている非認知能力育成について、ベストプラクティスの一つであるぐんま国際アカデミーの話を伺って、これからの群馬県の教育政策、教育イノベーションの参考にさせていただければと思う。

(平田教育長)

- ・金子校長はじめ、ぐんま国際アカデミーの先生方、そして素敵な授業を見せていただいた生徒の皆さんに心から御礼を申し上げます。
- ・そして、知事と教育委員の意見交換の場を作っていただいたことに、心より御礼を申し上げます。
- ・今、群馬県では、変化の激しい予測ができない時代の中で、子供たちが幸せに、そして幸せな群馬を築いていくような人づくりをめがけ、いわゆる始動人を目指して、認知能力だけでなく、非認知能力の育成に向けたプロジェクトを行っている。そうした中で、非認知教育専門家委員会を作って、非認知能力の科学的な育成をしようということに取り組んでいるところである。
- ・本日、ぐんま国際アカデミーでは、インターナショナルバカロレアのプログラムをフルスペックで行っているところを拝見できた。生徒は本当に生き生きとしていた。これから金子校長のお話を聞いたり、意見交換を通して、どうしたらあのような素敵な生き生きとした教室ができるのか、それを通してどのように非認知能力を伸ばしていくかということについて、意見交換ができればと思う。

3 議事

「群馬モデルの非認知能力（社会情動的スキル）育成に向けた取組の深化について」

以下の資料を参考配布。

- 資料1 「非認知能力の評価・育成（全体像）」
- 資料1 - 2 「非認知能力に向けた指定校による実践研究」
- 資料2 「S S E Sについて」

ぐんま国際アカデミー中高等部 金子校長から、資料3「国際バカロレア（IB）教育と社会情動スキル（SEL）」に基づき、ぐんま国際アカデミー中高等部の取組を説明。

○意見交換

1. 画一的な日本の教育体系、教員と生徒の関係について

(小島委員)

- ・学校は、教室で教える人と教えられる人という関係をイメージしていたので、授業を拝見して非常に斬新な思いをした。
- ・企業では、新入社員教育の中で協調性を非常に重視している。一方で、自分で物を考えて、意見が言える状況になっていない。日本の企業がこのような体制になっており、教育だけでなく社会自体がそういう組織体制になっていかないと、日本が国際社会の水準から取り残されるという印象を非常に強く受けた。

(山本知事)

- ・少し画一的な教育体系になっているのではないかという点について、金子校長はかが考えるか。

(金子校長)

- ・企業の社長もよく視察に来られるが、指示待ち社員が多くて困ると言っていた。指示待ち社員は、そこにしがみついて、どこかへ行く力もない、自分で生きていけないと。
- ・これからの世の中は、変化に適応し対応する、クリエイティブに、新しいことに挑戦する、そのような人間でないと、会社としても使いようがないというのをよく言われる。やはり社会の要請があると思う。

(山本知事)

- ・もう一つ、小島委員の話の中で、だいたい授業は先生が主役だという点について。やはりこれからは生徒が主役である。日本の学校現場は、先生が授業を統括するようなものである。群馬県も遅れていたが、パソコンを1人1台入れた。そうなってくると、先生が統括するというよりは、生徒の学びを助けるという流れになってきていると思うが、今の話はいかがか。

(金子校長)

- ・トップ校のトップの生徒はもともとアクティブラーナーである。学校を頼りにしているような人が逆に難関大学に行けない。だから、もともとは自分でやれる力はみんなあったと思う。
- ・一般の学校では、それをもともと地頭がいい、この子はもともとできる、で済ませていた。そうではなく、その生徒の能力を育てていくというのが、IB(国際バカロレア)のコンセプトである。
- ・能力を開発するという意味では、先生が常に表に出たら駄目で、これからは生徒を動かすという教育になっていくと思う。

2. 生徒の学習を促す評価方法について

(日置委員)

- ・どの学校でも学びに向かう力や主体性などを評価するところが非常に難しいと聞いている。IBのATL(Approaches to Learning)スキルでは、事細かに具体的に評価の観点が見られている。これは普通の学校でも評価の一つの指標になるのではないかと考えた。
- ・生徒の学習を促すための評価には、どのような形があるかを教えていただきたい。

(金子校長)

- ・本校の場合は、中間期末でテストをやる先生が少なく、エッセイ(論文)で評価をしている。その論文の評価もルーブリックとあって、評価の観点を生徒にも明確に示す。主体的に向かえることを評価するシステムとして、論文というのは大きい。
- ・もう一つは、本校では5段階評価の通知表は出さない。もともとIBは8段階評価で、指導要領では5段階評価に変換するが、通知表では数値も順位も出さない。各教科の先生が一人一人に対して、例えば君はこういうところがよかった、君はこういうことをもう少し伸ばしたらいい、というコメントを書く。1人の生徒の通知表が20何ページも

ある。人と比較するわけではなく、それぞれがどうこれから向上すればいいかというアドバイスが入っている。これもまた、生徒は積極的になる。

- ・また、通知表はネット配信している。コロナの前にシステムができていたことから、授業はZOOMで行い、通知表はオンラインで、何も問題がなかった。
- ・通知表そのものが、比較した通知表ではなくて、生徒一人一人を伸ばす、そのポイントを先生がアドバイスする通知表になっていることも非常に大きいと思う。

(日置委員)

- ・非認知能力は評価しにくいから非認知という名前がついている。ここが一番難しいと思う。

3. 教員の評価方法について

(山本知事)

- ・先生方はどのように評価されるのか。例えば、アメリカの大学では生徒の評価などいろいろ取り入れている。先生は統括する人、教える人というよりは、プロデューサー、メンターのようにやるということで、先生方はどのように評価されるのか。

(金子校長)

- ・管理職が授業観察を行う。授業が終わったら、あなたの授業はこういうところがいい、と評価する。この授業観察にも2つパターンがあり、研究授業のようにして見に行く授業観察と、アトラダムに抜き打ちで見に行くという授業観察とがあり、ラーニングウォークと言っている。研究授業で綺麗に授業しているだけでなく、普段がどういう状態なのかというのを評価するために、両方行っている。
- ・生徒が生き生きしていれば、あなたの授業はいいですねとなるし、あなたがしゃべり過ぎていましたよねという時もある。見るポイントは同じで、生徒をいかに生かしているかである。

4. 幼児期における非認知能力育成について

(河添委員)

- ・子供たちが主役で、オープンマインドの集団の中で生き生きと自分を表現していく子供たちを育みたいという思いを感じた。その中で先生方もオープンマインドで、先生方とも子供たちとも関わるという環境を校長先生が調整を図りながら皆で作られてきたというのを強く感じた。これは先生方の研修を通じてこの140のATLを理解し、誰でもできるように実践されてきたということだと思う。
- ・御校は中高生を中核とした非認知能力育成の要素を含むモデルとして示されていて、素晴らしい。更に、非認知能力育成に非常に重要とされている幼小児期の子供たちに向けての取組に、どうつなげながら群馬モデルとして示していくのが良いのかと考えていた。
- ・群馬県の幼小児期からの子供たちの自己肯定感、安心感、信頼感、個と集団を育む段階で、例えばATLのようなものができると、オール群馬で取り組める群馬モデルになっていくのではないかと期待している。

(山本知事)

- ・非認知能力育成を幼児期、もう少し基礎レベルからやるという考え方はいかが。

(金子校長)

- ・その通りである。I BにはM Y P (Middle Years Programme) のさらに前にプライマリー (P Y P : Primary Years Programme) というシステムがある。本校の初等部ではプライマリーは正式に導入はしていないが、実際にはプライマリーをやっている。I B教育は公開されており、認定校は世界で 5500 校だが、認定されていなくても I B をやっている学校はある。
- ・初等部でも、アクティブラーニングや生徒を自由に活動させており、その基礎がなく中等部の授業はできない。
- ・I B教育は公開されているため、これを参考にすれば誰でもできる。
- ・おっしゃる通りで、幼児教育は大切だと思う。

5 . これからの学校の存在意義、非認知能力育成につながる教員のスキルについて

(沼田委員)

- ・授業の様子や児童生徒の様子が社会の映し鏡のようなものであるという感想を持った。
- ・その上で質問が2つある。1つは、社会の映し鏡である学校という存在だとしたら、とてもシームレスになっていくと思う。課外活動であったり、社会と接点を持つことを学校として推奨しているときに、これからの学校というのはどういう存在である必要があるのか、どういう存在意義があるのかということについて、とても関心を持った。
- ・2つめは、これからの教員の皆さんがどういうスキルやマインドセットを持っていくことが、非認知能力を育成したり、新たな学校のあり方を提示していく群馬モデルに繋がるのか、ということについて伺いたい。

(金子校長)

- ・1つめのこれからの学校のモデルという点は、学校が一つの研究施設のようにそこで教員と生徒が閉じこもるのではなく、社会に開かれていることが絶対的に必要だと思う。本校の先生はY o u T u b e など様々なものを授業に取り入れて、生徒に知的刺激を与えている。教科書は使うが、教科書を教えるというレベルから脱却している。
- ・私のコンセプトは、学校は教育の一つの基地であるということ。生徒はここから社会に飛び出して、学校に戻ってくる。私は生徒にとって教育的な意味ある活動と思えばそれは全部公欠にしている。学校で学ぶのではなく、学校は一つの基地であって、ここから飛び出していく。だから、卒業しても全然行き詰らない。もともと社会と繋がって生徒たちは生きており、閉鎖的でない。或いは、教師から学ぶということでもなく、あらゆるところを教育リソースとして生徒は利用するという感覚である。
- ・2つめの教師のスキルということだが、ライフロングラーナーというのがI Bの根幹にあり、生涯を通じて学び続ける人ということである。向上するからには、新しいものに挑戦しなければならないし、将来に渡って、常に新しいものを求めていく、こういう生き方を推奨している。だとすれば、教員自体がそういう生き方をしなければならない。教員自体がライフロングラーナーになり、教員自体がこの学習者像を自分が実践する。
- ・本校では、年度末にI Bのコーディネーターが生徒にアンケートを取り、各クラスでI Bの学習者像の観点で最も優れていた人を推薦する。要するに、非認知能力の観点で表彰する。その対象に教員や校長も含まれる。校長も教員も生徒もみんなでこれを目指しましょうという体制が学校の中にあるのが、教育としては根幹だと思う。

6 . 教員の働き方改革について

(平田教育長)

- ・ I Bの学習者像で、「より」探求する人、「より」心を開く人という説明があり、大感動した。子どもたち自身を大事に、彼らの大事さをそのまま受けとめている上に、非常に精緻なプログラムを組まれ、先生方も一緒に学びながらというところに、すてきな教室があるのだと思った。
- ・ 今、教員の働き方改革というところが、世の中で問題になっている。先生は大変だと思うが、先生方を見ていると非常にモチベーションが高いと感じた。先生方のモチベーションをどのように保ち、ライフワークバランスを保っていくかということ伺いたい。

(金子校長)

- ・ 働き方改革という面では、部活動の負担は減らそうと思っている。1人部活では保護者を非常勤職員にして、顧問をしてもらうという新しい制度を作った。
- ・ あともう1つは、働き方改革で重要なのは、時間の問題ではなく、やりがいの問題だと思う。生徒のために何かやりがいを持って仕事ができる、先生が生き生きと楽しく仕事ができる、先生方が工夫をしながら仕事ができる、という状況である。先生方がやりがいを求めてクリエイティブに動くということは、苦しいわけではない。
- ・ やりがいとか生きがいという意味で仕事ができることと、無駄な負担は減らすこと、その両面で考えている。

7 . 最後に

(山本知事)

- ・ 群馬県ではデジタル化を進め、パソコンを生徒1人1台導入した。それにより、生徒それぞれの学びを応援する仕組みになってきて、今現場で頑張っておられる先生方が一番大変である。苦しいところだが、デジタル化が進むと、余分なところに使っていたエネルギーが削られ、本来のところに力を使えるようになる
- ・ 反面、生徒たちにも考えがあり、生徒の気持ちも評価に取り入れてもいいかと思った。授業への子供たちの希望、考えというのは今まで実は反映されてこなかったと思っている。ぐんま国際アカデミーは、こういうことをしっかり取り入れて、まさに共同作業でやっているというのに大変感銘を受けた。
- ・ 知事の哲学は群馬モデルを作って劣化東京を作るなということで、群馬県の強みを生かした独自モデルを作って、地方から世の中を変えていくというのが野望である。この太田のぐんま国際アカデミーから日本のスタンダードを作り出すという気概を持ってやっていただいているので、いろんな形で連携できると思う。ぜひ群馬県とのいろいろな連携も考えていただければと思う。

(以 上)